

それは、失われた詩 /
黒衣の狙撃手

八神大輔

それは、失われた詩^{うた}

目を開くと、知らない天井が見えた。

ベッドの寝心地も、慣れ親しんだものとは違う。

あたし、どうして……？ どこにいるんだろう……？

「目が覚めたかい、ハ丁」

声が出た方に顔を向けると、まず目に痛いほど鮮やかな紅が視界に入った。

寝癖でぼさぼさになっていたけど、それでもその真紅の髪は、豪華でとてもキレイに見えた。

そして、その髪と同じように紅い瞳が、まっすぐにあたしを見つめていた。

「おはよう、ハ丁」

「……」

「どうした、照れてるのかい？ タベはあんなに大胆だったのに」

「……」

「可愛かったよ、ハ丁」

「……」

「あのね、ジオルジュ」

「うん？」

「あなたって、もしかして、バカ？」

「……」

「……」

「……」

「……」

真紅の瞳が大きく見開かれたと思うと、すぐにすつと細くなつて、そして不機嫌そうにジオルジュは体を起こした。たてがみのようになつた髪を振り、頭をかき。

「ちえっ。北都はノリが悪いよ」

「品のない冗談は嫌いな」

「はいはい、悪うございました」

こちらに向けて、べつと舌を出したあと、ジオルジュはかつと満面の笑顔を浮かべた。

その笑みに笑い返しなから、あたしはようやく思い出していた。

昨晚、ジオルジュと弥十郎さんと三人でバーに行つて、ジオルジュに無理矢理飲まされて、……そこから、記憶がない。どうやら、ジオルジュの部屋に泊めてもらったみたい。

「気分どう？」

「……うん、爽快」

「そりゃよかった。ま、あんな甘いカクテル一杯じゃ、残りよるもないか」

意地悪く笑うと、ジオルジュは立ち上がつてキッチンの方に向かった。

「飯作るから。ちょっと待ってて」

「あ、手伝うよ」

「↑き↑き。お客さんは座つてな、ハ丁」

いたずらっぽくウインクして、ジオルジュは冷蔵庫から食材をいくつか取り出し、調理を始めた。

苦笑しつつテーブルについたあたしは、彼女のその手際よさに、少なからず驚くことになった。

率直に云つて、ジオルジュは家庭的には見えない。……ガサツ、とまでは云わないけど。

けれど、ジオルジュは鼻歌交じりに、てきぱきと調理をこなしていく。あたしの知らないその歌は、軽快だけど、どこか哀切があつて、心に残るメロディだった。

「……↑、すごいんだね、ジオルジュって」

「んー？ なにがー？」

できあがつた料理を皿に盛つて、ジオルジュがテーブルに持つてきてくれたとき、あたしは素直に感動を述べた。意外に、というニュアンスは伝わらないよう、注意しながら。

「お料理だよ。すごい手慣れてる感じ」

「そっか？ まあ、あたしがやるしかなかったからな。必要に迫れば、なんでも身に付くもんさ」

「そっなの？」

「そっだよ。彼は料理なんかでダメだったし、ルルージュもお嬢育ちだから、包丁なんか握ったことが……」

はっと、ジョルジュは口をつぐんだ。たちまち苦虫を噛み潰したような顔になる。

もちろん、あたしは彼女の言葉を聞き漏らしてはいなかった。

びっくりした。息が止まるくらい。

ルルージュがお嬢育ち……ってこともそうだけど（でもまあ、あの高飛車な態度は、納得できなくもない）。それより何より。

「一緒に……住んでたの？」

「……」

「ジョルジュと……ルルージュが？ なんで？」

「……」

ジョルジュは面をそらし、唇を強く噛んだきり、答えようとはしてくれない。

そんな彼女の横顔を、あたしはじっと見つめ続けた。

せつかくのジョルジュの手料理が、冷めていつてしまう。

「話したく……ない？」

「……」

「うん、わかった。じゃあ、いただきます」

そう云って、あたしはまずスプーンから手をつけた。少し冷たくなっていただけ、それでもその味にはとても暖かみがあった。幸せな気持ちになった。

この味をかつてルルージュも味わっていたのだと考えると、少し、悲しくなったけれど。

彼女たち二人と、そして今は喪われている、あたしの知らない誰か。きっと幸せな記憶を共有しているのに、どうして、今は仲違いをしているんだろう。それとも、同じ記憶を持つ

ているからこそ、二人は相容れないのだろうか。

「……ごめんな、北都」

その言葉に顔を上げると、ジョルジュがすまなそうにあたりを見つめていた。

嫌だ、彼女のそんなへこんだ姿なんて、見たくない。

「どして？ おいしいよ、これ」

「……そっか」

あたしが精一杯の笑顔で答えると、ジョルジュもやっと笑ってくれた。

それだけでいいんだ。あたしは、きっと。

「なあ、北都」

「んー？ なあに？」

ガツガツと、少し行儀悪いぐらいの勢いで食事を平らげながら、あたしは返事をした。沈んだ空気を吹き飛ばそうという意図より、単純においしかったのだ、ほんとに。

「あんな……あたしたちのチームに入らないか？」

「……え」

冗談、ではなかった。ジョルジュの瞳は、とても真剣だった。

……少しも迷わなかった、と云えば、嘘になる。

昨日も感じたとおり、ジョルジュと弥十郎さんのような軽な「仲間」関係は、うらやましかった。あたしがルルージュや千鳥とチームを組んでいるのは、分不相応だってこともわかっている。

だけど、それでも。

あたしは首を横に振った。

あたしのチームは、「ルージュ」だから。

「……そっか」

「ごめんね、ジョルジュ」

「いや……こっちこそ、つまらないこと云って、悪かった」

落胆を表さず、ジョルジュは笑ってくれた。それに感謝して、あたしも笑顔を返そうとしたとき。

「でも、ルルージュには気をつけるよ、北都」

怖いぐらい真剣な顔になって、ジオルジュはそう云ったのだ。
つた。

「なに、ジオルジュ、まだそんなこと」

「北都の云いたいことはわかる。でもこれは、ルルージュ本人の
人柄がどうこうって問題じゃない」

「……どういう……こと？」

息を飲んで問い返したあたしから、ジオルジュはそつと視線
をそらした。

その表情に浮かんでいたのは、ルルージュへの憎しみや怒り
ではなくて。

「あいつの周りは、きな臭すぎる。これはもう絶対に避けら
れないことなんだ。それが、あいつの歩いてきた道だからな」
とても悲しそうな色だった。

「ごつめーん、遅くなって……」

居住区からの転送装置を出るなり、あたしは大声で叫び
ながら走り出した。

いつもの時間より、大幅に遅れてしまっている。ルルージュ
はもちろん、遅刻常習の千鳥さえ、もう先に来て待っていた。

「……」
「遅いよ、北都ちゃん」

例のごとく、ルルージュは無関心な風であたしの方を見よ
うともせず、千鳥は珍しく待つ側に回ったのが嬉しいのか、
満面の笑顔で手を振った。

その笑顔に。あたしは夕べ会ったヒューマーを思い出し
た。

「ん？ どうしたの、北都ちゃん？」
「う、ううん、なんでも」

彼に会ったことを千鳥に話すべきかどうか、判断がつかな
くて、あたしは曖昧な表情でごまかしてしまった。

姉さんのことを教えてくれ。

勢い込んでそう云った直後、弥十郎さんははっと我に返っ
て、あたしの肩から手を離れた。そして、決まり悪げに黙り
込んで、目をそらしてしまった。

「どういう……ことなんですか？ 千鳥が、弥十郎さんのお
姉さんなの？ それなのに、教えてくれて、どういう……」

「……」
「ねえ、弥十郎さん」

「……ダメだよ、北都。こいつ、こうなったら、石みたいにだん
まりになっちゃうからさ」

ジオルジュがそう云いながら、肩をすくめた。

冗談めかしてはいたけれど、彼女の瞳は、それ以上聞かな
いでやってくれ、と云っているようで、あたしは口を閉ざすし

かなかった。

そのあと、千鳥のことが話題になることはなかったのだけ
れど。

「……行きますわよ」

あたしの逡巡にも、千鳥の不審にもやっぱり全然お構いな
しで、ルルージュがラグオルへの転送装置に踏み出した。

「あゝ、待ってよ、ルルージュったら。北都ちゃん、行くこゝ
う、うん」

ぎこちなく頷きながら、あたしも転送装置に入った。

何度使っても慣れることのない、不思議な浮遊感と、そし
てそのすぐあとに来る墜落感。さらに転送後もしばらく残っ
ている不快なしこり。

それを我慢しながら辺りを見回すと、そこにはあたしたち
の知らない光景が広がっていた。

剥き出しの岩盤と、自然が作り出した複雑な迷路。日の
光など一切届かない地中なのに、わずかに周囲を見渡せるほ
ど明るいの、岩に密生したコケが光を放っているのだろう
か。

あのドラゴンを倒したあと、あたしたちが発見した洞窟だ
った。

ハンターズギルドにも報告してあるので、当然、ここは秘密
の場所ではない。千鳥の入院のため、しばらくあたしたちが
探索を休んでいる間にも、他のハンターズが何組もここを訪
れているはずだ。

しかし、そのいずれもはかばかしい成果を上げられてい
なかった。

聞くところによると、地表とはまた違うモンスターが徘徊
しているらしい。ブーマによく似てるけど、その巨大な歯並び
からシャーク系と呼ばれる連中や、カマキリやカニのどっかい
のに、毒を吐く花……想像しただけで、気が滅入る。

そんな未知の場所に、あたしたちは今日初めて本格的に
足を踏み入れたのだ。

ルルージュと千鳥は、いつもと変わらない。ルルージュは無
表情に、千鳥はニコニコと笑顔で、恐れも迷いも緊張も無縁の
様子で歩いていく。

一方、あたしはと云えば。

「なんだか、辛気くさい場所だよな」

「う、うん」

「これなら、まだ明るい分、地表の方がマシかも」

あたしの緊張をほぐそうと、千鳥がいつも以上に話しかけ
てくれる。

そう、あたしもいつも通り緊張してた。それは間違いない。
ただそれ以上に、あたしは様々な疑問が胸の内に渦巻い
て頭がくらくらするほどで、せつかくの千鳥の言葉にも生返
事ばかりしていた。

姉弟なのに、長らく離ればなれだった様子千鳥と弥十
郎さん。

一緒に住んでいたというルルージュとジオルジュ。
ルルージュが口にした「あのひと」。

千鳥の昔の通り名 『青の戦慄』。

あたしなんか興味本位で迂闊に首を突っ込んでいい話じ
やない、そう思って、これまで何も訊かずに来た。しかし、積
もりに積もった疑問は、ふと頭をもたげた瞬間、あたしの心
を掴んで離さなくなってしまった。

「……北都ちゃん、やっぱり変だよ」

「……千鳥……」

心配げに眉を寄せて、千鳥があたしの顔を覗き込んでく
る。

その表情に、あたしはすべてを尋ねてみたくなる。そして、
同時に、過去のことなんかどうでもいい、今のあたしたちが
あれば、とも思う。

結局、あたしは不器用に作り笑顔を浮かべて、目をそらす
ことしかできなくなるのだ。

「な、なんでもないの、ほんとに。ごめんねっ」

振り向いて、小走りに前へ出ようとしたとき。

あたしの背中に向けて、千鳥が呟いた。とても小さい、消えてしまいそうな声で。

「……北都ちゃん、私が怖い？」

「え」

思わず振り返ると、千鳥はその場に立ち尽くして、じっとあたしを見つめていた。

口元には笑みをたたえて。瞳には涙なんか全然なくて。

だけど、その笑顔は、どうしようもないくらい悲しい気持ちにさせられた。どうして、そんな何もかも諦めてしまったような顔をするの？

それは、あたしのせい？

「怖い？」

首を傾げて、千鳥がもう一度訊いた。

そこでようやく、あたしは千鳥が云っている意味がわかった。

あのとき、ジョルジュの不用意な言葉に対して見せた、千鳥の冷たい怒り。

その姿を見たことで、あたしが千鳥への態度を変えてしまったんじゃないかって、彼女はそう考えて

「違う！ 違うよ、千鳥、そんなんじゃないよ！」

「……」

「ほんとだよ!! あたしは、千鳥が大好きだもん。友達のために、あそこまで真剣に怒れる千鳥を尊敬こそしても、怖がったり、嫌いになったりなんて、そんなこと絶対ないよ！」

それは、紛れもなく本心だった。

確かにあれにはびっくりしたけど、でも、それだけだ。ルルー・ジュのために、自分を犠牲にしようとした千鳥。ルルー・ジュのために、怒りを露わにした千鳥。どちらも、千鳥だ。変わらない。

彼女の腕を取り、必死に云い募るあたしの目をしばし見つめて、千鳥は、

「……うん」

微笑んで、頷いてくれた。

その笑顔はもう、いつもと同じ、優しい天使の微笑だった。やっぱり、もうやめよう。昔、ルルー・ジュや千鳥に何が

あったか、なんてことにこだわるのは。

こうして、今、この笑顔が見られて。こうして、今、三人一緒にいられるなら、それだけでいい。

そう思って、踵を返した瞬間。

いつの間にか立ち止まって、こちらを振り返っていたルルー・ジュと、目が合った。

相変わらず彼女の面から感情を読みとることはできない。

しかし、その射すくめるような視線は、あたしの中の葛藤なんてすべて見通しているようで、あたしは思わず生唾を飲み込んだ。

「何をうだうだ考えているんですの。らしくもない」

「……そ、そうだよね」

あたしの返事なんか耳に入っているのかどうか、すぐにまたルルー・ジュは視線をそらして、さっさと歩き始めてしまった。千鳥が微笑んだまま、そのあとに続く。

二人はいつもと変わらないのに。

こうして三人でまた冒険できること、それだけを楽しみにしていたはずなのに。

本当、らしくないよね、あたし。

あたしは気合を入れるために、自分の頬を両手で軽く叩いて、二人のあとを追った。沈んだ空気を払おうと、下手くそな鼻歌なんか口ずさんだりして。

それが、大失敗だった。

「……」

ルルー・ジュが足を止めて、もう一度振り返る。

その顔には、今度のはっきりと感情が浮かんでいた。怒り、不快、猜疑、そういったものが。

そうして、とても冷たい瞳であたしを見据えるや、ソウル

「イーターの刃を真っ直ぐあたしに向けた。

「ル、ルルージュ!」

「ルルージュ、どう……」

「……なぜあなたが、その歌を知っているんですの」

「……歌……?」

「……歌……?!!」

「思い出した。あたしがつい口ずさんだそのメロディは、今朝、ジオルジュが料理をしながら歌っていたものだ。なぜか印象的で耳に残っていて、つい口をついて出てしまった。」

「それは今では、私しか知らないはずです。……いえ、もう一人。私と、ミアンだけしか」

「……」

「ミアンから、教わったのですわね」

ルルージュが刃を下げ、口元を歪めた。嘲笑の形に。

取るに足りない、無価値なゴミ屑を見るような目で、ルルージュはあたしを見ていた。初めて会ったときでさえ、こんな風に見下した眼差しを向けることはなかったのに。

あたしは恐怖と困惑とやるせなさで、全身が震えてしまっていた。

「ルルージュ……」

「あれと随分仲良くなったご様子。いつそミアンとチームを組めばよろしいんじゃないやありませんこと。無理に私たちとつきあう必要はありませんわ」

「そんな……!」

あたしは、ルルージュや千鳥と一緒にいたいんだよ? 同じチームだって、誇りに思ってるんだよ? だから、ジオルジュの誘いも断ったんだよ?

云いたいことはたくさんあるのに、何も言葉として出てこない。ただ瞳に涙を浮かべて、唇を振るわせるあたしを、千鳥がかばってくれた。

「ルルージュ、云いすぎだよ」

「ただどそれが、最悪の言葉を引き出した。あなたが望んだことでしょう」

「……!」

「これ以上ないくらい、あたしは目を見開いていたと思う。そのあたしの前で、千鳥は蒼白になり、あたしからもルルージュからも目をそらしていた。」

「ルルージュ、何を……」

「あなたもいい加減、覚悟を決めなさい」

「……」

「な……に……? 二人とも……何云ってるの……?」

「わからなかった。もう何も。」

「これ以上、何も聞きたくなかった。ただど、あたしは言葉にしてしまっていた。」

「ルルージュ、何を……?」

「あたしがジオルジュと組めばいいって……? ルルージュも千鳥も、そう思ってるの……?」

「……」

「あたしたち、同じチームじゃないの? 一緒に、いられるんじゃないの?」

「……」

「迷惑……だった? あたし、やっぱりお荷物で……チームだなんて……ひとりりで浮かれて……それで……」

「……北都ちゃん」

あたしと同じように、瞳を涙でいっぱいにした千鳥が、あたしの方に近づいて手を伸ばそうとした。

それを見た瞬間、あたしは耳を塞いで、駆け出していた。

「嫌だ! もう嫌!」

「北都ちゃん!」

「いやああああああ!!」

もう、何も、聞きたくなかったし、見たくなかった。

文字通り、子供のように泣き叫びながら闇雲に走って、つまづいて転んで、しこたま鼻を打ち付けて、あたしはようやく少し落ち着いていた。

けど、落ち着いて考えをまとめようとすればするほど、さっきの出来事が逃れようのない現実としてのしかかってくる、錯乱しそうになった。

あたしたちは、仲間じゃなかった。

ルルージュと千鳥は、あたしにつきあってくれてただけ。お荷物なのを我慢して、面倒を見てくれてただけ。

そんなの、考えてみれば当たり前のことだ。あたしと彼女たちじゃ、技量も何もかも違いすぎる。今まで一緒にだったことの方が不思議だと、誰もがそう云うだろう。

でも。

ルルージュが、ほんとにごく稀に見せてくれた笑顔。

ぐりぐりとあたしを撫でてくれた千鳥のあの手のぬくもり。

あれは、確かにあったことのはずだ。

それが全部、偽りだったなんて。

「嘘だよな? ルルージュ……千鳥……」

信じたい。

けれど、ルルージュがあたしを見据えたあの視線の冷たさが、あたしの心を挫けさせた。

どうすればいいんだろう。

そう考えて、鼻をすすりながら周りを見回して、あたしはまた違う意味で途方に暮れた。

……どこ、どこ?

前回に引き続き、今度も道に迷うなんて、情けないっらない。しかも、あたしはリユーカーをまだ唱えられないし、テレビパイプも持っていない。

どうにかして転送装置まで辿り着かないと、パイオニア2に帰ることもできないというわけだ。

本当、いつまで経っても、こんな風に自分で自分の始末さえつけられないんだから。ルルージュに愛想尽かされるのも、当然なんだ。いつそこのまま野垂れ死にしちゃおうか。

冷たい岩の上に座り込んだまま、そんなことを考えた。

……バカだ、あたし。

ルルージュや千鳥なら、絶対に何があっても諦めたりしないだろう。

彼女たちと一緒にいたいなら。それにふさわしい、自分できやいけない。

「よしっ」

立ち上がり、あたしは涙をぬぐって、ハンドガンを構え直した。

ルルージュたちとの関係を修復する術があるのか、それは今はわからなかったし、考えるとますますに挫けそうになるので、考えないことに決めた。

とにかく、生きて帰る。それぐらいできなきゃ、あたしには何を云う資格もないはずだ。

あたしは注意深く周囲を見回しながら、ゆっくりと天然の通路を歩いていった。

……だけど、これって、ほんとに天然かな?

確かに元々、大洞窟があったんだとは思うけど、なんだか人の手が入っているような気がしなくもない。迷宮として成り立たせるために……。

考え事をしてる内、少し広いスペースに出た。そして、薄暗い闇の向こうに、何かの影が動いたような。

「ルルージュ……?」

この期に及んで、まだそんな甘い想像をしてみよう。それがあたしの致命的にダメなところなんだなあと、あたしは骨身にしみるほど思い知ることになった。

その影は、こちらを振り向くと、高々と太い腕を上げて耳

障りな金切り声を上げたのだ。

「ブ、ブーマー!? ……じゃない、シャーク、だっけ」

おぞましい牙を剥き出しにして、そいつはあたしの方に向かってきた。

あたしはハンドガンで牽制しつつ、後ろに下がった。

長射程武器で敵と対するときは、距離を保ち、決して囲まれないようにすること。それが鉄則だ。

あたしはその基本に忠実だったけど、もう一つ重要なことを忘れていた。安全な退路を確保しておくことを。

その広場にいたシャークは、そいつ一匹だけではなかったのだ。迂闊にその中で動いたことで、他の連中まで引き寄せってしまった。

「まずい……かも」

かも、とか云ってられる状況ではない。あたしはとりあえず、元来た通路に向かって走った。狭い通路を利用すれば、少なくとも囲まれるのは防げるはず。

「っ!!」
連中に背中を向けて走り出して数秒、焼けるような痛み

に思わず膝をついてしまった。
振り向くと、爪をあたしの血で染めたシャークが、誇らし

げに腕を掲げている。嘘、なんでこいつら、こんなに速いの？
あたしは地べたを這って、どうにか連中から遠ざかるうとしたが、そんなのが間に合うはずがなかった。たちまち周りを取り囲まれてしまう。

それに、背中からの出血で、すでに意識が朦朧としていた。

このまま失血死するのと、あの爪で引き裂かれるのと、どっちが早いだろう……ぼんやりそんなバカなことを考えていたあたしは、皮肉なことにその爪のきらめきに、あの禍々しい鎌の刃を思い出した。

彼女なら、きっと諦めない。

あたしは全身の力を振り絞って仰向けになり、ハンドガンの引き金を弾いた!

闇雲に撃ち出されたフォトンの弾丸は、至近距離であっただけに、全弾、シャークどもに叩き込まれた。

しかし、この程度の威力では、奴らをわずかに怯ませることしかできない。負傷が連中の怒りに油を注いだのか、シャークどもは金切り声を上げて、爪を振り上げた。

あたしは、諦めない。

額の汗が目にしみて、傷の痛みを意識が飛びそうになって、それでもあたしはハンドガンを構え続けた。

無数の爪が、銀の軌跡を描いて振り下ろされる。

「……え……?」

爆音が、響いた。訓練所で聞いたことがある。大口径のフォトンの弾丸が次々吐き出される音。

そして、シャークどもが撃ち崩される、断末魔の雄叫び。

返り血が気持ち悪い、なんて思う余裕は、あたしにはなかった。

どうにか首を曲げて、通路の方に目を向ける。

意識を失う直前、あたしが目にしたのは、闇に溶け込むように、その場にショット系の武器を構えて立つ、黒ずくめのレイキャシールだった。

Phantasy Star Online Ver.2

'Story of Scarlet Sorceress' Episode III

"The LOST SONG"

end

黒衣の狙撃手

1

目を開くと、知らない天井が見えた。

……って、このモノローグ、すでに一度使わなかったっけ？
しかも、今朝。

それに、見えているのは天井じゃなくて、剥き出しの岩盤だ。どうして、こんなところで、あたしはひっくり返って

「目が覚めた？」

少し低い、落ち着いた感じの音がする。

あたしはその声の方を向きながら体を起こそうとして、激痛に顔をしかめることになった。

「いっ……っ……」

背中がずきずき痛む。その痛みが、頭をはっきりさせてくれた。

そうだ、あたしはルルージュたちと……その……別れて……一人でさまよってる内、シャークどもに囲まれて、負傷したんだ。

最後まで諦めまいとはしたけど、正直、助かるはずがない状況だった。だけど、そう、今まさに奴らがあたしにとどめを刺そうとした瞬間、フォトンの弾丸が次々撃ち出されて。文字通り、あたしは九死に一生を得た。

その、あたしを助けてくれた射手が、目の前にいるこの人だ。

正確には、アンドロイド。レンジャー仕様の女性型だから、レイキヤシールということになる。全身、黒いカラーリングで、闇に溶け込むように立っていた。猫みたいに瞳だけを輝かせながら。

「大丈夫？ 一応、応急処置はしたんだけど」

「は、はい、ありがとうございます」

「アンドロイドには体力回復アイテムが命綱だからね。悪いけど、気前よく使ってあげるわけにはいなくて。あなた、二三

「マンなんだから、レスタぐらい使えるんでしょ？」

「え……あ……はい」

彼女の云うとおり、アンドロイドはテクニクを使えない。基本的にアイテムだけが、回復のための手段になる。その分、腕っ節が強いし、毒や麻痺に冒されないうってメリットがあるんだけど。

あたしは痛む頭をなんとか集中させて、回復テクニク・レスタを唱えた。

実は、あたしがテクニクを使うのは、これが初めてだ。これまではずっと、千鳥やルルージュが回復も支援もしてくれていた。このレスタ自体、千鳥が教えてくれたものだ。

……本当に、あたしは浮かれていただけで、自分では何もできていなかったんだって、思い知らされる。

「どう？ 歩けそう？」

「あ、は、はい！」

また、あたしの悪い癖だ。すぐ自分の考えに沈んじゃう。あたしはまだ多少ふらつくけど、どうにか自分の足で立ち上がって、命の恩人に頭を下げた。

「本当に、ありがとうございます。助かりました」

「いいのよ、気にしないで、北都ちゃん」

「え？」

今、名前を呼ばれた？ 知ってる人だっけ???
あたしはあまり優秀でない記憶力をフル稼働させて、検索をかけた。でも、やっぱり該当者はいない。そもそも、あたしにはアンドロイドの知り合いはほとんどいないし。

もう一度、彼女をじっと見つめてみる。

アンドロイドに体型の話をしてもしようがないのかも知れないけど、細身で均整の取れた、とても女性的なプロポーションをしている。ポニーテールのような髪型(実際には、センサー類が詰まったアンテナの一種らしいけど)が印象的だ。

表情は……あまりない。これもアンドロイドなら当たり前だけど、彼女はフェイス部分も非常に人間らしく精緻に作ら

れていて、そのせいで奇妙な違和感があった。

そう、違和感。それは、彼女の無表情さから来るものだけじゃなくて。誰かに……似ている……？

「どうかしたかしら？」

「あ、いいえ、そのっ」

あまりにぶしつけにじろじろと顔を見てしまったため、彼女が首を傾げた。

あたしは慌てて言い訳を探したものの、結局うまい口実も見つからないことだし、素直に疑問をぶつけてみることにした。

「ごめんなさい、あたし、あなたのこと、覚えていなくて……」

「それはそうでしょうね。今、初めて会ったんだから」

はい？ 初対面？ だったら、どうして、あたしの名前を？

「北都ちゃんでしょ？」

「は、はい、そうですね」

「はじめまして。私はマリア。千鳥の友達よ」

「あ……」

彼女が口にしたその名前が、あたしに深い安堵と、大きな不安をもたらした。

千鳥の友達なら、あたしのことを知っていても不思議じゃない。千鳥から、あたしのお話を聞いてるんだらう。

でも、それはどんな話なのか。厄介なお荷物？ 身の程知らずのお調子者？ それとも

「じゃ、行きましようか」

あたしの動揺に気づかなかったのか、それとも、あえて無視したのか、彼女 マリアはそれ以上、何も云わず、背を向けて歩き出した。

「転送装置まで案内してあげるわ。私もテレパイプの手持ちがなくてね」

「あ、はい、ありがとうございます」

云いながら、あたしは小走りにマリアのあとを追った。彼

女は大腿でスタスタと歩いていくので、ちっこいあたしだと、早歩きをしなきゃ追いつけない。

道順を完璧に覚えているのか、マリアは少しも立ち止まることなく、歩き続けた。そして、あたしの方を振り返らないまま、口を開いた。

「ところで、どうして一人であんなところに倒れていたの？」

「……それは……」

思わず口ごもってしまう。

実際、なんと説明すればいいのだらう。あたしの軽率な行動で、ついにルルージュも堪忍袋の緒が切れた……そういうことだらうか、端的に云えば。

でも、少し落ち着いて考えてみれば、それは変だ。あのルルージュが、「我慢して誰かにつきあってきた」なんて。

千鳥が取りなしてくれていた……ってことも考えられるけど、たとえそうであっても、ルルージュが聞き入れるとは思えない。

……いちばん考えたくなかったのは。あたしなんて、いてもいなくても、ルルージュにはどうでもよかった、そういう結論。

「あの二人に見捨てられたの？」

「ちっ……違います、そんなの！」

ムキになるのは、凶星だからじゃないの。ちらっとこちらにくれたマリアの流し目が、そう云っているような気がした。

「じゃあ、どうして？」

「ちよっと……その……行き違いがあつて……、あたしが、飛び出して来ちゃって……」

「なるほど。あなたの方が、彼女たちを見限ったわけね」

「だから、そんなんじや！」

「違うの？ よくわからないわね」

本当に不思議そうに首を傾げて、マリアは足を止めた。振り返り、腰に提げた銃を持ち上げて、あたしの方に向ける。

「な……っ」

「動かないで」

銃口がほんの少し上がり、引き金が引き絞られる。まるでマシンガンみたいな連射速度で、フォトンの弾丸があたしの背後に叩き込まれた。

耳障りな、金切り声が響く。

驚いて振り向くと、巨大な鎌を振り上げたオオカマキリグラスアサツシンというそうだが倒れるところだった。

気持ち悪いことに、それは小さな虫の群体だったようで、それらが蜂の子を散らしたように逃げ去っていく。

「あ……ありがとうございます」

再び命を助けられたことに気づき、あたしはマリアにもう一度頭を下げた。

マリアは銃をしまい、ショットを構え直すと、また何事もなかったように歩き始める。

「……武器、色々持ってるんですね」

「ハンターズなら、状況に応じて武器を使い分けるのが常識よ。レンジャーなら特にね」

「そ、そうですか」

うう、あたしはまともに使えるのはハンドガンぐらいだ。それも完璧に使いこなしてるとは云いがたいけど。

でも、あたしの知ってる範囲では、みんな自分の愛用の武器を使い込んでいる。ルルージュも、千鳥も、ジヨルジュも、ラフィールも。

「だけど、何かひとつ極めるのも、大事かも……」

「それも常識」

すばっと云いきられてしまった。

ルルージュとはまた違う意味で、マリアとの会話はつらい。助けてもらっておいで、こういうこと云うのはなんだけど。

まるで、機械と話しているみたいだ。……って、それは当たり前なのか。アンドロイドって、みんな、こんな感じなのかな？ 私もこのクラッシュバレットがいちばん馴染んでいるわ。誰だ

って、そういう武器はあるでしょう」

両腕で抱えたショットを軽く持ち上げて、マリアは云った。クラッシュバレット。へ、あれがそうなんだ。最近、眼福も

のの武器によく会うなあ……」

「そうですね、ルルージュのソウルイーターみたいに……」

「あれはまた特別よ」

マリアが軽く肩をすくめた。

無表情なその面を、一瞬かすめたのは……嘲笑？

「彼女はソウルイーターを使い込んでるわけじゃない。ソウルイーターが彼女を縛って離さないだけ。呪いのようなものね」

「どういう……ことですか？」

さらっとマリアが口にしたことに、あたしは息を飲んで立ち止まってしまった。

ルルージュの過去に、ソウルイーターが関係してるだろうってことは、あたしももうわかってた。でも、それはあたしなんかの想像を遙かに超えて、血生臭いものなんだろうか。

あたしが足を止めたことに気づいて、マリアが振り向いた。冷たい瞳が、じっとあたしを見据える。興味深い観察対象

みたいに。

「ルルージュがなぜソウルイーターを持っているのか、知らないの？」

「……はい」

「そうなんだ。じゃあ、千鳥が『青の戦慄』と呼ばれていた頃のこと、ひよつとして知らない？」

「……」

「なんにも知らないのね」

初めて、マリアの唇が笑みをかたどる。

今度こそはつきりわかった。それは紛れもなく、嘲笑だ。「それでよく、チームだなんて云えたものかわ」

「昔のことなんて……関係ないじゃないですか……」

「本当？ 本当にそう思ってる？ だったら、今日、どうして彼女たちと仲違いすることになったの？」

「知っている。この人、あたしたちの間で何があったか、知ってるんだ！」

知ってて、あたしをつけてきて、偶然を装って近づいた？

でも、なぜ？ どうして、そんなことをする必要があるの？

「あなた……誰？」

「あら……意外と、鋭いのね。でも、今、質問しているのは私」

微笑んだまま、マリアがゆっくりあたしに近づいてくる。あたしは気圧されるように、後ずさっていた。

「なぜ、ルルージュや千鳥に、昔のことを訊かなかったの？」

「……」
「過去なんてどうでもいい……そんな奇麗事を云う資格は、もう今のあなたにはないわよね？ さあ、答えて。どうして？」

「それは……」

「代わりに云ってあげましょうか。あなたはね、聞くのが怖かったのよ。彼女たちと深く関わるのが、怖かった」

「そんな、ちが」

「違うわいわ。何も知らなければ、傷つかずにいられるものね。あの二人がこれまで何をしてきたのか。これから何をしますか。『あたしは知らなかった』それがすべての免罪符になる。そうでしょ？」

「……」

気がつけば、マリアはあたしの正面に立ち、間近な距離で、震えるあたしの顔を、瞳を、覗き込んでいた。耳元で囁くように、言葉を続けるマリア。

「勘違いしないで。責めてるんじゃない。誰だって同じなもの。どんな人だって、自分だけは傷つかない位置にいたいものだわ」

…… そう、なのかもしれない。

ルルージュは、それを見抜いていたから、あんな風に云った

のかもしれない。

…… だけ。

「…… うん、マリアの云うとおりだよ」

……」

マリアが満足げに微笑んで、かがめていた腰を上げる。あたしは唇を噛んで、その嘲りに満ちた目を見返した。

「あたしは、怖かった。ルルージュや千鳥の過去に踏み込むことが。きっと、あたしなんか想像できないような想いを、あの二人はしてる。それを知ってしまったって、それでも変わらずにいられるか、自信がなかった。それは本当」

「物わかりがいいわね」

「でも、それだけじゃない！」

マリアの笑みが凍る。冷たい無感情な仮面を取り戻して、マリアはあたしを見下ろした。

あたしは、この人だけに、負けたくない。

「あたしが、ルルージュや千鳥と一緒にいたいって気持ち！

それも本当だもん！」

「…… だから？ 互いに深く関わり合うのを避けて、それで『チーム』だなんて云えるの？ あなたは彼女たちを利用してただけよ」

「違う！」

理屈なんかなく。あたしはその一言に、マリアの云うことを全否定する想いを込めて、叫んだ。

マリアの表情に、苛立ちが浮かんでくる。

「頭の悪い子ね。何が違うの？ 根拠を云ってごらんさいよ」

「根拠？」

「そう。云えるわけないわよね。そんなもの、ないんだから」

「あるよ」

「……」

「あたしたちは、仲間だもん！ それだけ！ 他には何もいらない！」

けして長くはない時間だけど、あたしたち三人は、共に過ごしてきた。

その間に、心を通わせ合ったなんて、自惚れてはいない。だけど、あたしたちは仲間だった。そのことは、あたしがどれだけ不安に思おうが、ルルージュがどれだけ冷たい態度に出ようが、絶対に覆せやしない！ ましてや、こんな人の言葉なんかで！

「……仲間……」

押し殺した声でマリアが呟き、腰の銃を持ち上げた。銃口を、あたしのこめかみに押しつける。

「偽善者の奇麗事には吐き気がするわ」

「……」

「あなたは仲間ごっこに浸ってればいい。でも、ルルージュや千鳥は、実際、どう思ってるんでしょうね？ たとえば、ここで私があたさを殺せば、彼女たちは仇を取ってくれると思う？」

マリアの細い指が引き金にかかった。

不思議と、恐怖はなかった。あたしは見開いた目で、マリアをまっすぐに睨み据えていた。

マリアが苛立たしげに唇を噛み、引き金を絞ろうとした刹那。

「その前に、あなたの首が飛びますわ」

低い、静かな声。

とっさに腕を上げて、マリアは首筋を銃でガードした。間一髪、背後から迫った禍々しい鎌の刃が、銃身で受け止められる。鋼の銃身をフォトンの刃が抉る、硬質の音が響いた。

「ルルージュ……」

「世話の焼ける方ですこと」

やっぱりあたしの方なんて見ようとせず、死神の鎌を振りかざしたルルージュは、とても退屈そうに呟いた。

2

目の前の状況が、あたしには信じられなかった。

ルルージュの鎌を、間一髪防いだマリアが、飛びすさって銃を構える。そんなマリアを、氷のような視線で見据えるルルージュ。

もし、あと数秒、ルルージュが現れるのが遅ければ、あたしはきつと生きていなかった。

でも、どうして？ ルルージュは……あたしを……助けに

来てくれたの……？

「……」

ルルージュはやっぱり、あたしの方なんて見ようとしなかった。あたしも問いかけることさえできず、座り込んでしまっていた。恥ずかしながら、今更、腰が抜けてしまったのだ。

しばしの沈黙のあと。仕掛けたのは、ルルージュからだった。

緋色の姿が流れるように走り、ソウルイーターの刃がきらめく。マリアは銃で牽制しながら下がっているけど、押されているのは明らかだった。

こんな接近戦では、銃は不利だ。ルルージュはあんな大降りの武器を、あんな華奢な腕で軽々と振り回しているし。

さらに、マリアにとって致命的だったのは、ルルージュには、とっつも頼りになる相棒がいたってこと。

「チエックメイト、かな？」

音もなくマリアの背後に回り込んだ白い影が、彼女の首筋にフォトンの刃を突きつけた。

「……ちっ」

舌打ちして、マリアが動きを止めた。背後を完全に取られ、正面にはルルージュ。さすがの彼女も抵抗を諦めたようだ。

千鳥は微笑んで、マリアの手から銃を奪った。

そう、千鳥もやっぱり、笑顔のままだった。だけど、それはあのとときと同じ笑顔だ。感情のない、仮面の笑顔。千鳥が、きつとあたしには見せたくないと思っていた姿。それはおそらく、千鳥が本当に怒っている証拠なんだろう。

でも、それはどうして？ ルルージュが傷つけられたわけじゃないのに。彼女の怒りの元となっていて、それは。

「じゃあ、事情を説明してもらえないかな？」

「……」

マリアは怯えた風もなく、つんと視線をそらした。その前に、ソウルイーターの刃が突きつけられる。

「黒衣のマリアも、ずいぶんと趣味が悪くなりましたこと。こんな子供をいたぶって、何になりますの？」

……子供。それはそうなんだけど、はつきり云われると、やっぱり落ち込むなあ。

わずかに恨みがましくなっていただろう、あたしの視線を、ルルージュはいつも通りきっぱり無視していた。そうして、つまらなそうな態度のまま、言葉を続けた。

「あなたの一存では、ありませんわね」

「……さあ？」

マリアはやはり動じることなく、冷笑して見せた。死を覚悟しているというより、まるで危機を一切感じていないみたいだ。

ルルージュたちが、自分を殺すはずがないと思ってるんだろうか。……残念だけど、ルルージュはそんなに甘くない。それに、マリアもそんな甘い期待をするようには、思えないんだけど……。

「私に云わせれば、あなたたちがこんな小娘にそこまでムキになる方が不思議だわ。『青の戦慄』と『緋の蠍』が庇護してやらなきゃならない価値が、その子にあるの？」

「尋ねているのは、こちらですわ」

「教えてくれれば、代わりになんでも答えるわよ。もし、何か

特別な力があるのなら、『教授』に報告しなくちゃならないもの。貴重なサンプルだってね」

マリアが何を云っているのか、わからなかった。教授だとか、サンプルだとか。

でも、そんなことを気にしてられる状況ではなかった。

マリアがそう口にした瞬間、千鳥は蒼白になって面を引きつらせ、ルルージュは激情にまなじりを裂いた。

文字通り逆上したルルージュが、ソウルイーターを振りかぶる。

「……」

「ルルージュ、ダメ！」

あたしは叫びながら、彼女に駆け寄ろうとした。その声に、はっとルルージュが我に返り、刃を止める。千鳥も一瞬、あたしに気を取られた。

その隙を、マリアは見逃さなかった。千鳥の腕から素早く逃れ、武器を拾うと、洞窟の闇の中へ駆け出した。

「……」

忌々しげに、ルルージュがマリアの去った方を睨み据える。

あたしは、また、ルルージュの邪魔をしちゃったんだろうか。あそこで止めるべきじゃなかった？

ううん、そんなことない。もし本当に必要だったなら、どんなことがあっても、ルルージュは自分の手を止めたりしないはずだ。ルルージュが千鳥を手にかけるなんて、そんなことでも。

「……北都ちゃん」

「え」

呼びかけられ、はっと振り向くと、千鳥がそばに立っていた。瞳を涙でいっぱいにした彼女は、膝をつく、手を伸ばしてあたしを抱きしめた。

「ち、千鳥……？」

「よかった……無事で、よかったよ……」

そう云って、千鳥はあたしに頬ずりをした。涙の雫があた

しの頬にも触れて、そのぬくもりにあたしは驚いた。

「千鳥……」

どうしようもない喜びと安堵が込み上げてくる。だけど同時に、拭いきれない不安もまだわだかまっていた。

千鳥は、優しすぎるから。あたしを拒むことが、きつとできない。

その優しさに甘えて、彼女を傷つけてしまうなら、やはりあたしは彼女たちから離れるべきなんじゃないだろうか。

あたしは思わず、そばに立つ緋色の魔女を見上げていた。誰かに頼っていいことじゃない。あたしが自分で決めなきゃいけないことだ。

そうわかっていたけど、ほんの少し、背中を押してほしかった。あたしはここにいていいんだと、そう思えるような、何かが。

けれど、ルルージュはやはりあたしと目を合わそうとはせず、ふいと背中を向けた。

「……追いますわよ」

マリアが去った方向に、歩き出そうとする。あたしはとっさに声を張り上げていた。

「待って、ルルージュ！」

ルルージュが足を止める。振り返っては、くれない。その背中に、あたしは祈るような気持ちで問いかけた。

「どうして…… 助けてくれたの……？」

「……」

「北都ちゃん……」

「どうして……？ 答えて、ルルージュ……！」

耐えられないほど、重い沈黙。実際にはほんのわずかな時間だったのだろうけど、あたしには永劫に近い長さに思えた。

そして、
緋の蠍のルルージュは、深い深いため息混じりに呟いた。

「……理由が、必要なんですの」

「……え……？」

「くだらないこと」
嘆きも諦めも蔑みもなく、ただ独り言のように言葉を吐き出して、ルルージュは歩き出した。

茫然としているあたしを、千鳥が手を貸して立たせてくれた。もう、いつもと同じように優しく穏やかに微笑んでいる

彼女は、小首を傾げて、あたしの顔を覗き込んだ。

「北都ちゃんは、さっき、ルルージュを止めてくれたよね？」
どうして……？」

「どうしてって、そんなの、当たり前……」
「……そういうことだよ」

「……」

「ね？」

千鳥が笑う。天使のように、屈託なく。
本当に？ 本当に、あたしが想っているとおりだと、自惚れていいの？

早く追いかけないと、またルルージュに怒られるってわかっていただけ。あたしは千鳥にもう一度抱きしめられて、少しだけ、泣いた。

暗い洞窟を、あたしたちは走った。

「マリアとはもうだいたい差をつけられてしまったので、その姿を追うことはできない。だけど、ルルージュは諦めていなかったし、ただ闇雲に探し回ってるわけでもなさそうだった。」

分かれ道にぶつかると、ルルージュは軽く千鳥を振り向く。すると、千鳥は少し考えて、「こっちはかな〜」と一方を指差すのだ。ルルージュは微塵の疑いも見せることなく、その方向にまた走り始める。

でも、どうして、千鳥にはマリアの逃げた方向がわかるんだらう？ あたしなんかには全然気づけない痕跡が、どこかに残っているのかな？ それに、そもそも。

「マリアは、まだここに居るの？」

「……」

「そうみたいだね〜」

「どうしてかな？ ただ逃げるなら、シティに戻った方が確実だと思っただけ……」

「それは〜」

「逃げて居るわけではない、ということですよ」

ルルージュが曲がり角で足を止めた。今度は千鳥に道を尋ねるのではなく、道の奥を伺うような様子を見せている。

「逃げて居るんじゃない……？」

「マリアの目的が、もし北都ちゃんを殺すことだったら……きつと……間に合っただけ……」

とても云いにくそうに口にした千鳥の言葉に、あたしは今更息を飲んで、そのことに気づいた。

「そりゃそうだ。殺そうと思えばいくらでもチャンスはあったし……。そもそも、シャークに襲われたあたしをただ傍観していたら、彼女が手を下す必要さえなかったのだ。」

「だったら、マリアの目的は……？」

「北都さんを餌に、私たちをどこかへ誘い込みたかったのじゃないね」

「ということは、転送装置へ案内してくれる、って云ったのも、嘘だったってこと？ 助けるふりをして、あたしを誘導して……」

「だったら、この先にあるのは……！」

「罠……!？」

「そもそもレンジャーは、敵を待ち伏せて遠距離から始末するのが得意なものですわ」

「さっきみたいな接近遭遇戦は、いちばん苦手なんだよね〜」

「なんでもないことのように、二人はいつも通りの調子で云った。」

それはとても心強いことなんだけど……でも、ほんとに大丈夫なんだろうか。三対一のメリットも、離れた距離からショットをばらまかれたら、意味がない。

そんな危険を冒してまで、マリアを追う必要があるんだらうか。いくら「敵」だからって……

「……敵？」

何気なく浮かんだその言葉に、あたしは息を飲んだ。

「つい先日、バトル中のあたしたちを襲ったあの事件。あれは明らかに悪意を持って仕組まれていた。」

そして、あたしを騙して、ルルージュと千鳥を誘き出そうとしたマリア。それってつまり……

「問いかけるあたしの眼差しに、ルルージュが答えるはずはない。」

「彼女はいつもよりわずかに緊張した面持ちで、ソウルイーターを構え直した。」

「私が先に出来ますわ。マリアの位置を掴んだら、千鳥、彼女の動きを止めて」

「……了解〜」

「あ、危ないよ、ルルージュ！」

「承知の上ですわ」

それでも逃がすことができない。そういうことなの、ルルー

「ジュ？」

彼女が死神の鎌を振るい続けたその理由が、突然、目の前で明らかにされそうな予感に、あたしの心臓は早鐘を打った。

ルルージュが角を飛び出す。

その途端、奥からフォトンの弾丸が数発放たれたんだけど

「……？」

あたしと千鳥は、安堵の息を吐くと同時に、目を見交わして首を傾げた。

マリアの攻撃はまるで見当違いの方向を向いていた。あれじゃ牽制にもならない。

ルルージュはとりあえず反対の壁際まで走り、様子を窺っているみたい。彼女も不審に思っているんだろう。

マリアはどういうつもりなんだろう？ あれじゃ、自分のいる場所をあたしたちに明かしただけじゃない。

「北都ちゃん、行こ〜」

千鳥が無造作に歩き出した。あたしは焦って、彼女の腕を取る。

「ちよ、ちよっと待って、千鳥。まだ危ないよ！ 何があるか

……」

「ここにはもう、マリアの気配がないから、大丈夫だよ〜」

「ニコニコ笑って、千鳥はそう答えた。

気配……？ そういうの、わかっちゃうものなんだろうか。それはあたしと千鳥の実力の違い？

不得要領顔のあたしにもう一度微笑んで、千鳥はルルージュのいる方へ向かった。あたしも駆け足でそのあとに続く。

ルルージュも幾分警戒を解いた様子で、立っていた。

「外れ、だったね〜」

「……それでもありませんわ」

云いながら、ルルージュはマリアが攻撃してきた方向を見ている。瞳にあるのは、獲物を狙う冷たい光。

「次が本番でしょう。こっちへ来い、という誘いですわ」

「……あ……」

「やっぱ、そうだよな〜。回りくどいのはいつものことだけど……何を考えているのかな〜」

千鳥の表情がわずかに曇った。一方、ルルージュはいつも通り淡々と答えて、歩き出した。

「行ってみればわかりますわ」

危ないよ、とは、もう云えなかった。ただ、どんなことを目にしても、すべてを必ず受け止めようと決意して、あたしは緋色の影を追った。

果たして、そこにマリアは立っていた。背後には、激流が轟々と音を立てている。こんな地下に、こんな水道があったなんて。

マリアはあたしたちを見て、薄く微笑んだ。嘲りに満ちた、あの笑みだ。

武器を向けようとはしない。例のクラッシュバレットを掲げてはいるけど、銃口は地に向けていた。

もちろん、そんなことじゃ全然油断なんてできない。彼女の抜き手の素早さは、目の前で確認したことだ。

だけど、さっきルルージュたちが云ったように、待ち伏せて遠距離から仕留めるのがレンジャーの戦い方のはずだ。どうして、あたしたちを待ち構えておきながら、攻撃しようとしていないんだろう。

ルルージュはマリアをまっすぐに睨み、その挙動を見逃すまいとしている。千鳥は辺りの様子を窺っているみたいだ。

「ようこそ。そんなところじゃ話しづらいから、こちらにいらつしやいよ」

しれっと、マリアはそんな台詞を口にした。芝居がかった態度で、あたしたちを迎え入れるような礼までして見せる。

「……」
ルルージュは無言で足を踏み出した。

マリアの思惑はどうあれ、確かに、接近しなければ戦いにならない。テクニクを使う、という手もあったが、遠距離戦ならレンジャーであるマリアの方が有利だろう。ソウルイーターにこだわる、ルルージュのスタイルとも合わない。

もっとも、普段はダッシュで敵に斬りかかるルルージュも、今回は慎重に足を運んでいた。マリアがいつ銃口を上げても、対処できるように。あたしと千鳥も、そのあとに続く。

結局、マリアは冷笑を面に貼り付けたまま、手出しをせず

にあたしたちを見ていた。

あと一歩で斬りかけられる間合いまで来て、ルルージュは足を止めた。

マリアが立っていたのは、激流に突き出した板場のような場所だった。……いや、これはむしろ……。

「いつまでもお客を待たせるものではありませんわ」
ルルージュが退屈そうに呟く。マリアは不敵に微笑むと、

手元の機械を操作した。
「そだね、そろそろ始めましょうか、ショータイムを」

「ひゃっ!?!」
がくん、と足場が揺れる。周りを見回すと、足場が岸を離れ、激流に流されていた。

そう、これはやはり、岸に結びつけられた筏だったのだ。逆巻く波に翻弄され、まともに立っていることも難しい

のは、あたしだけで、ほかの三人は、全く動じた様子もなく立っていた。いったい、どんなバランス感覚をしてるんだか……

「……」
「北都ちゃん、大丈夫?」

「う、うん、ごめんね」

また一際大きな揺れが来て、危うく転びそうになったところを、千鳥が支えてくれた。

その様子を横目で見て、ルルージュがまたつまらなそうにため息をついた。

「……それで? 余興はこれだけですの?」

「まさか。せっかちなね。まずは舞台を用意しただけ。アトラクションはこれからよ。ほら」

マリアが顎で、あたしたちの背後を指した。
ルルージュと千鳥は油断なく、あたしは思わず全身で振り返ってしまふ。

「……?」
岩が見えたのだと、思った。あんなのにぶつからなくてよかったなあ、なんてバカなことを考えていて。

そしたら、その岩がどんどん大きくなってきた。

岩が大きくなるとなるわけがない。そう、それは動いているのだ。この筏に向かって、近づいてきている。

そして、それは岩と云うには、細長い形をしていることに気づいた。硬い甲殻に覆われ、頭と思しき辺りには仮面のよ
うな巨大な殻と牙、腹部に並ぶおぞましい節足。あれは

「で、つかいムカデ！」

「ムカデは河を泳いだりしないんじゃないかな？」

あんな化け物を前にして、千鳥はやっぱりのほんとして
る。それは心強い、心強いけど

「……来ますわよ」

ルルージュの声に、はっと我に返る。いつの間にか、そいつは
筏と併走していた。甲殻に空いた穴から、光弾が放たれる。

「……！」

千鳥があたしを抱えて、横っ飛びに飛んだ。ルルージュも、
そしてマリヤもその攻撃を避ける。

「……え？ マリヤも？」

「ちよ、ちよっと！ なんなの、これ！」

「……さあ？ 教授は、『デ・ロル・レ』って呼んでたわ」

「名前なんかどうでもいいの！ あなたが操ってるんじゃない
の!？」

「こんな化け物、操れるわけじゃない」

肩をすくめて、さらりとマリヤはそんなことを云ってのけ
た。

そんなバカな。マリヤはこいつ、デ・ロル・レがここにいること
を知った上で、あたしたちを誘い出したはずだ。それなのに、
操ることもできないなんて。

それに、逃げようともしない。それは、その手段さえない
ということ？

自分の命さえ犠牲にする捨て身の罠を仕掛けながら、マリ
ヤは実に淡々としていた。それはルルージュの無関心さとも

全然違う。なんだろう、この違和感は……。

「わわわっ」

一際大きい衝撃が来た。振り返ってみれば、なんとデ・ロル
・レが半身を筏に乗り上げている。筏が大きく傾き、そして

「……本当に世話が焼けますこと」

襟首を捕まれ、猫の子のようにぶんと振り回された。その
ゾツとすると同時に、あたしを引っ張ってくれた手の主を

見ると、彼女は眉をひそめてあたしを睨んでいた。
「戦うときは、目の前の敵に集中なさい」

「……ごめんね、ルルージュ」

あたしの返事なんてもちろん聞かず、次の瞬間にはルルー
ジュはあたしを放り出して、ソウルイーターを振りかぶって

いた。デ・ロル・レの触覚をかくぐり、その硬い甲殻に鎌の刃を
叩きつける。

さすがのソウルイーターでも、その殻を易々と切り裂くこ
とはできない。それでもルルージュは斬撃を繰り返し、千鳥は
ラフオイエを連発してフォロイしていた。

そうだ、ルルージュの云うとおり。すぐ自分の考えに沈ん
じゃうのが、あたしの悪い癖だ。今はまず、こいつを倒さなき
や!

あたしはハンドガンを構えて、立て続けに引き金を弾いた。

とにかくでかいから、狙いをつける必要がないのはありが
たい。けど、甲殻が硬すぎて、あたしの攻撃程度じゃほ
とんどダメージを与えられてない。

それでも、何もしいよりはマシのはずだ!

そうやって、容赦なく繰り出されるデ・ロル・レの触覚を必
死で避けながら、あたしたちが攻撃をしている間、マリヤは
やはり涼しい顔で、手出しをせずに眺めていた。

後ろから撃たれないだけいいのかもしれないけど、いった
い、何を考えているんだろう、彼女は。むかつくなあ。

と、マリアの方を軽く振り返った瞬間、また大きな衝撃があった。

まずい、また戦闘中に気を散らしちゃった。慌てて振り返ると、デ・ロル・レは筏を離し、再び水中に潜んでいった。そのまま徐々に遠ざかっていく。

……諦めた、のかな？

薄闇の中、目をこらしてデ・ロル・レの姿を追う。

違う、まだいる。ある程度距離を保って、追ってきている。

どうする気だろう、と思った瞬間、デ・ロル・レは蛇が鎌首をもたげるように、頭を高く掲げた。口元が蒼い光を放つ。

「……！」

飛び退く隙もなかった。あたしのすぐ横を青白い光が走り抜けた。そのまま水面に刺さり、一瞬、蒸気が浮かぶ。

生体レーザー！ なんてあんなもの持ってるの？ こいつ

……天然の動物じゃない!!

あんなのに当たったら一発でお終いだし、直接喰らわなくても、筏に当たればこんなのすぐ木っ端微塵だ。さっき乗り上げてきたとき、分解しなかったのが不思議なぐらい。

そんな戦慄をあざ笑うように、第二波が放たれた。

幸いだったのは、狙いをつける、という高度な真似はできないらしいってことだった。今度は避ける必要もなく、あさっての方向を飛んでいった。

苛立ったように、デ・ロル・レが金切り声を上げる。第三波。

今度も、あたしたちが立っている方には来なかった。しかし、その射線上には、黒衣の人影が、あった。

「マリア……！」

やはり彼女は動じない。それどころか、避けようとしないうえに、ただ皮肉な笑みを浮かべたまま、迫り来る蒼い光を見据えていた。

あたしは。

考えるより先に、動いていた。

「な……っ」

「北都ちゃん！」

ジャンプして、マリアを押し倒す。その上をレーザーがかすめていった。髪の毛が少し焦げたような気がする。おまけに、ハンドガンを取り落としてしまった。初めてラグオルに降りて以来、愛用していた銃が転がり落ち、水の中に沈んでいく。

「あ……あーあ」

ハンターズになったとき支給されただけの代物とはいえ、やはりそれなりに思い入れがあった。茫然と水面を見つめるあたしに、怪訝そうな声がかげられた。

「……なんのつもり？」

振り返ると、マリアが不機嫌さを瞳に表して、あたしを睨んでいた。

別にお礼を云ってほしかったわけじゃないけど、その態度は、腹に据えかねた。

「なんのつもりって……それはこっちの台詞だよ！ 死にたいの!」

「あなたには関係ないでしょ」

「関係ないって……」

「私が死のうが生きようが、あなたには関係ない。むしろ死んだ方がいいんじゃないの？ あなた、私に殺されそうになったの、もう忘れたの？ほんと、頭の悪い子」

立て板に水、という感じで、マリアはそんなことを云ってのけた。

あたしはもう頭に血が上って、言葉も出てこない。今がどんな状況なのかさえ、忘れてしまっていた。

そして、そんなあたしをいつも止めてくれるのは。

「確かに、あなたの生死は私たちに関係ありませんわ」
低い、退屈そうな声なのだ。

ルルージュはいつの間にかあたしの背後に立ち、マリアを冷たい瞳で見据えていた。

「けれど、三対一より、四対一の方が効率がいいのは、確かですわね」

「ルルー・ジュ……？」

「……」

「こんな小娘に助けられたのが癪に障るなら、今この場で借りを返してはいかが」

「マリアの電子の瞳が、煌めいた。人間なら、怒りに瞳を燃やしたというところだろうか。」

「ルルー・ジュの挑発に対し、マリアはクラッシュバレットを持ち上げることで答えた。」

「マリア、何する……」

「とっさに、ルルー・ジュの前に手を広げて立つ(ちびのあたしがそんなことをしても、長身のルルー・ジュをかばうことなんて、ほとんど無理なんだけど)。」

「ただ、マリアの銃口は、もっと後ろを向いていた。第四波を放とうとしていたデ・ロル・レにフォトンの弾丸が叩き込まれ、怯んだ奴は再び体を水中に潜り込ませた。」

「マリア……」

「また来るわよ」

「マリアが不機嫌なまま、云い放つ。」

「その言葉通り、デ・ロル・レはまた泳ぐ速度を上げ、筏に追いついてきた。水しぶきを上げながら、筏に乗り上げ、触覚による攻撃を繰り返して来る。」

「ルルー・ジュはすぐにそちらへ走り寄り、ソウルライターを叩き込んだ。千鳥もラフオイエを唱え、マリアもクラッシュバレットを連射している。」

「あたしも……！と思ったけど……武器がない!!」

「これ、使いなさい」

「おたおたしているあたしの前に、マリアがさっき使っていた銃を突き出した。あたしのこめかみに押し当てられた、あの銃だ。」

「え……？」

「驚いて彼女を見上げたあたしの方を、マリアは見ない。不機嫌な態度そのままに、吐き捨てた。」

「ルルー・ジュが云ったでしょう。効率の問題よ。どのみち、あんなハンドガンじゃ役に立たないんだから」

「う、うん」

「受け取った銃を構えて、引き金を弾く。これまでのハンドガンとは全然違う重い反動が来た。そして、デ・ロル・レの甲殻に穴が空き、金切り声が響く。」

「すごい……!!」

「ほけっとしてないで、どンドン撃つ!!」

「は、はいっ」

「あたし、千鳥、マリアの三人は、触覚攻撃に巻き込まれないよう距離を取って、攻撃を繰り返す。ルルー・ジュは単身、懐に飛び込み、敵の攻撃をかいくぐりながら斬撃を続ける。もちろん千鳥は回復と補助テクニクで、ルルー・ジュをフォローし続けている。」

「そして、ついに。ルルー・ジュ渾身の一撃が、デ・ロル・レの甲殻に突き立った!」

「陶器が砕けるような音とともに、デ・ロル・レを包んでいた甲殻が剥がれ落ちていく。中からはぶよぶよしたデ・ロル・レの本体が現れた。うっ、気持ち悪いよう。」

「身を守る殻を失ったデ・ロル・レは、たちまち大きなダメージを受け、のたうち回る。やがて筏に掴まる力も失い、断末魔の呻きをあげながら、激流の中に飲み込まれていった……」

しばらくは、誰も何も云わなかった。

あたしは疲労困憊で座り込んでしまっていたし、さすがのルルージュや千鳥、そしてマリアも、荒い息をついていた。

気がつけば、水の流れがだいぶ緩やかになっている。ぼろぼろになり、もういつ分解してもおかしくない状態の筏は、岸にぶつかって、動きを止めた。

「……」
「マリアが素早く、岸へと飛び移る。」

そのあとをすぐルルージュが追い、千鳥も、そしてあたしもおっかなびつくりで続いた。

マリアは逃げようとすするわけでもなく、例の嘲笑をやはり浮かべて、あたしたちを軽く見渡した。

「あのデ・ロル・レを倒すなんてね。『緋の蠍』も『青の戦慄』も、まだまだ現役ってことかしら」

「……」
「『黒衣の狙撃手』もね」

「……あたしが数に含まれないのは、まあ、しょうがない。千鳥はニコニコと微笑みながら、一步、前に出た。そして。」

「千鳥……？」
「とても深い憂いを面に表して、小さな声で呟いた。」

「これも、教授の差し金なの……？」
「『教授』……？」

マリアが何度か口にしていた言葉。特定の人物を指すであろう、その教授っていったい……？

「……そうよ。あなたたちの力がどんなものか、見てみたいとおっしゃってね」

マリアの言葉に、千鳥の憂いはますます濃くなっていった。あたしはその姿に、不安で胸がいっぱいになる。千鳥は時々悲しそうな表情をするけど、ここまで深い憂いを見せたこ

とはなかった。

どういうことなんだろう。教授って人と、千鳥と、マリア。きつとルルージュも無関係じゃない。

普通に考えれば、それが「敵」の正体なんだろうけど……それならなぜ、千鳥はそんなに悲しそうな顔をするの……？

「一步間違えば、あなたも死ぬかも知れなかったのに……それを承知で……」

「……」
「本当、変わらないんだね、あの人は」

「……」
「マリアの表情は動かない。」

そうだ、千鳥の云うとおり、あれはマリアを犠牲にして初めて成立する罠だ。実際、彼女は命を落とすところだった。

そんなことを平然と命じる人がいて、それに盲従する人がいる。そんなこと、あたしには信じられない……。

しばしの沈黙のあと、千鳥はマリアを正面から見据えた。強い決意と覚悟を秘めたその表情は、いっそ悲壮だと云えるほど青ざめていた。

「教授に伝えて、マリア。私は絶対に帰らないって」
「マリアが何か答えるより早く。緋色の影が、つと前に出た。」

「残念ですけど、それは無理ですわね」
「ルルージュ!!」

千鳥が驚いて、ルルージュの横顔に視線を向ける。ルルージュはそんな千鳥さえ無視するように、マリアだけを睨み据えていた。

「私は私の敵を見逃すほど、寛大ではありませんわ」
「そう云って、ソウルイーターをマリアに突きつけるルルージュ。」

それは、生かしてこの場を去らせない、という宣告だった。マリアが嘲笑を深くし、クラッシュバレットを構え直す。

「……第二ラウンド開始ってことね」
「ルルージュ、待って……」

「……」

「マリア、あなたは北都さんを欺き、私たちに銃を向けた。その罪、その命で贖いなさい」

「……え？ ルルージュ、今、なんて……？」
あたしが茫然と見上げ、千鳥がよりいっそう蒼白になって見つめる前で。

今まさに、ルルージュがマリアに斬りかかろうと、ソウルイターを振り上げた刹那。
「そう云わないで、今日のところは退いてくれないかな？」
錆のある男性の声が響いた。

「……」

千鳥が息を飲んだ。
ルルージュの瞳が燃え上がった。
マリアが、小さくため息をついた。

その場の全員の注視を受けて、マリアの背後の暗闇から、ゆっくりと男の人が現れた。

ヒューマン、だと思う。ロープのような衣装を着ているから、フォーマーだろうか？ だとしたら、とても珍しい存在だ。

歳は……結構、若く見える。見えるんだけど……同時に、とても老成しているようにも感じる。いや、老成とは違う。なんだろう、生気がないというか……そう、まるで幽霊みたいな……

そして、それとは対照的に、ルルージュはぎらぎらするほどの殺意を漲らせていた。いつもモンスターを相手にするときとは、比べものにならない。そばにいるだけで、首の後ろがチリチリするみたい。

そんな殺意を正面から受けながら、その人は涼やかに微笑んで、云った。

「私も、私の娘同士が争うのは見たくない」
「娘っ!? 娘って……」

あたしじゃない。そんなの、当たり前。
あたしはルルージュと千鳥を交互に見た。ルルージュは変わ

らず殺意で目を爛々と輝かせ、千鳥は……なぜか瞳を涙でいっぱいにしてた。じゃあ……千鳥が……？

「……教授……」
「久しぶりだね、千鳥」

とても優しげで、だけど、どうしてか背筋が寒くなるような微笑を、その人、教授は浮かべていた。

まるでその笑みが、その声が抗いがたい誘惑であるかのよう、千鳥は瞳を固く閉じて、激しくかぶりを振りながら答えた。その様子とは裏腹に、その声はとてもか細かった。

「私は、あなたの娘じゃありません」

「つれないね。家出娘が帰ってきてくれれば、すべてが丸く収まるというのに」

「……」

「よく考えてくれ」

「考えるまでもありませんわ」

ぎりぎりまで引き絞られた弓が、矢を放つ。まさにそんな感じだった。

死神の鎌は、文字通り死を運ぶ旋風となって、教授の首筋に振り下ろされた。

あたしが今まで見た中で、それは最も速い一撃だった。なのに。

「君も相変わらずだな」

苦笑混じりにそう云った教授の首と紙一重の距離で、ソウルイターは止められていた。

もちろん、ルルージュが止めたわけじゃない。

教授が首筋に右手を挙げていたので、あたしははじめ、彼が素手での刃を止めたのかと思った。でも、いくらなんでも、そんなことあり得ない。

よく見ると、教授は手に何か持っていた。何か、カードのようなもの。

あんな薄いもので、あんな軽い動きで、ルルージュの一閃を止められるなんて。

あたしは驚愕に言葉も失っていたけど、ルルージュは動揺したりしない。即座に刃を引いて、もう一度振りかぶった。

教授は芝居がかった仕草で肩をすくめ、苦笑して見せた。「ごつしても、と云うならお相手するけど……君たちも今は万全の体調じゃないだろう？ あのデ・ロル・レを倒したのはお見事だが、さすがに無傷とはいくまい」

その通りだった。先のドラゴン戦同様、いやそれ以上に、あたしたちはポロポロだった。特に常に接近戦を挑んでいたルルージュの消耗は激しい。さっきの一撃が出せたのが信じられないくらいだ。

ルルージュはそんなことを意に介さず、それどころか戦意をますます高ぶらせているけれど。

「まあ、君なら確かにそれでもやるだろうね。だけど、巻き添えを食らう方はたまったものじゃないだろう。その小さい子は無事には帰れないね」

教授があたしの方を指差す。あたしはカッとなって、思わず銃を構えた。

冗談じゃない。ルルージュの足手まといになるくらいなら、あたしから って、え？

「ルルージュ……？」

信じられない。ルルージュが、鎌を下ろしたのだ。敵を前にして、ルルージュが、戦闘態勢を解いた。そんな。

「聞き分けがよくて助かる。君も、もう自分の判断ミスで人が死ぬところは見たくないだろうっしね」

相変わらず優しいげに、表向きだけ優しいげに、教授が云う。ルルージュは唇を噛み、拳を振るわせていた。あたしが初めて見た、屈辱に震える、ルルージュの姿。

「卑怯者……！」

絞り出されたその声を聞いてしまったとき。

あたしはもう一度銃を構えて、引き金を弾こうとした。あたしのせいで、ルルージュが辱められるなんて、そんなこと許

せなかった。

マリアが銃を構えるのが目に入る。あたしが撃つのと、どちらが速いか。

「……っ」

激痛に顔をしかめたときは、銃を取り落としてしまった。驚いて見上げると、ソウルイーターの柄であたしの手を強打したルルージュが、冷ややかにあたしを見下ろしていた。

「ルルージュ……」

ルルージュは何も答えてくれない。

教授がまた薄く微笑み、マリアが銃を下ろして、教授のそばに歩み寄った。

「いい仲間に恵まれているようだ。次に会うのが楽しみだよ」

「……」

「教授、あなたは……」

「千鳥、僕には君が必要なんだ。忘れないでくれ」

「……っ」

「待っているよ」

教授がリューカーを唱え、その輪の中に二人は消えた。

残されたあたしたちは、しばらく何も云えなかった。ルルージュはすでに表情を消して、いつものように佇み、千鳥はうつむいて嗚咽をこらえているように見えた。

そして、あたしは悔しくて悔しくて、口を開けばその瞬間に泣き叫んでしまいそうで、教授が消えた空間を睨んでいた。

「……帰りましょうか」

ぼつりと漏らされた、つまらなそうな呟き。リューカーの詠唱。

浮かび上がった光の中に踏み込もうとしたルルージュの腕を、あたしはとっさに掴んでしまっていた。

「ごめんね、ルルージュ、あたしのせいで……っ」

「……」

「ごめん、ルルージュ、ごめん……」

涙で顔をぐしゃぐしゃにして、謝った。

ルルージュは振り返ってくれない。だけど、あたしの手を振り払いもしなかった。

千鳥が愁いを含んだ微笑みで、あたしたちを見つめている。

「……戦ったら、負けていましたわ」

「……え……」

「無駄死にだけは許されませんの。だから、今は、妥当な判断ですわ」

「ルルージュ……」

「帰りますわよ」

歩き出そうとするルルージュの腕を、あたしはまだ放さなかった。ようやく怪訝そうに眉をひそめて、ルルージュが振り返る。

その感情の読めない瞳を、あたしはまっすぐに見つめた。

「あたし、ルルージュのことが知りたい」

「……」

「ルルージュや千鳥のこと、もつとちゃんと知りたい。過去に何があったのか、教えてほしい。二人が背負ってるものを、あたしも一緒に背負っていきたい。だから」

「……」

「北都ちゃん……」

云ってしまった。

これまで分不相応な望みだと。あたしが踏み込んでいい領域じゃないと、自戒してきた。

過去なんかどうでもいい、それもほんとの気持ちだって思っている。

だけど、マリアの云うとおり、知るのが怖かったっていうのもあった。

もしルルージュや千鳥が話したくないというなら、あたしは二度と訊かないだろう。でも、あたしはまだ尋ねてもいいな

かった。壁を作っていたのは、あたしの方だった。あたしたちは、仲間なのに。

静かな目の色でじっとあたしを見つめていたルルージュが、不意に空いた方の手を伸ばした。

ひっぱたかれるような気がして、思わず目を閉じて、身をすくめた瞬間。

柔らかく、頭を撫でられていた。

「……え……？」

目を開けると、ルルージュは未だまっすぐあたしを見つめていた。とても、とても悲しそうな色を、瞳に宿して。

「あなたはそんなもの背負う必要は、ありませんわ」

「……え……」

「あなたは今のまま、ただ真っ直ぐでいれば。……それが、千鳥の望むことなのですから」

「ルルージュ……」

「帰りますわよ」

云った途端、ぐるっと踵を返して、ルルージュはリユーカーの輪に入ってしまった。引き留める隙もない。

あたしはほとんどぼかんと口を開けてそれを見送って、そして、おずおずと手を挙げて自分の頭に置いてみた。

そこにさっきまで触れていた、あたたかいぬくもり。

「いいな、いいな、北都ちゃん。ルルージュはなかなか撫でてくれないんだよ」

そんなことを云いながら、千鳥がそばにやってきた。彼女

ももういつも通り、「二三」と満面の笑顔を浮かべていた。

「……うん、びっくりした」

「あはは、そうだよ。でも、云っちゃダメだよ、怒るか

ら」

「コロコロと喉を鳴らして、千鳥が笑う。うん、もちろん、云えるわけない。そんなの怖くて……」

こんな大変な出来事があるって、これからまだまだ恐ろしい

ことが起きそうな予感があつて。

それなのに、あたしはいつもと同じように笑っている自分に気づいた。

結局、あたしが不安に思っていたものは、はじめからすぐそばにあったと、そういうことなんだろうか。マリアに何度も云われたとおり、あたしって、ほんとに頭が悪い。

「じゃあ、私たちも帰ろうか？」

「うん……あ、これ、どうしよ」

そのときになって、ようやくあたしは自分が持っている銃に気づいた。マリアに借りたままだったのだ。

「もらっとけば？」

「え、でも……」

「平気平気。マリアはいつぱい持つてるからね。見せて。」

……あ、ヴァリスタだね、らっきー」

千鳥が笑顔で云うと、それも悪いことのように聞こえない。

ヴァリスタといえば、かなり名の知れた短銃のはずだけど

……まあ、いつか。とりあえず借りとこ。うん。

「じゃあ、帰ろっか」

「うん。……ねえ、北都ちゃん」

「え？」

「ありがとうね」

「……ええっ？」

リユーカーの輪に踏み込みかけたところで、思いがけない千鳥の言葉に、あたしは驚いて振り返った。

千鳥は、やっぱり微笑んでいた。だけど、それはいつもとは違う。

さっきのルルージュと同じように、とても、とても悲しげな

「ルルージュのそばにいてくれて、ありがとう」

「な、何云ってるの、千鳥？」

「……おかげで、私も覚悟が決まったよ」

「千鳥……？」

「さ、帰る。疲れたね、今日は」

問い返そうとしたときには、千鳥はあたしの手を引いて、

リユーカーに入っていた。

空間を越える不快感と、危機の連続で心身共に疲れ切っていたあたしは、シテイに着くと同時に気を失ってしまった。

そのことを、あたしはものすごく後悔することになったのだ。

覚悟。

その言葉の意味を、どうしてあそこで問い質しておかなかったのかと。

Phantasy Star Online Ver.2
'Story of Scarlet Sorceress' Episode IV
"The Sniper in Black"
end

それは、失われた詩 / 黒衣の狙撃手

intermission -

部屋に入るなり、ルルージュは大きなため息を漏らした。さすがの彼女にとっても、今日は色々なことがありすぎた。

北都の感情の振幅の大きさは、正直、ルルージュの理解の外にある。彼女が笑い、怒り、涙を流すその理由が、ルルージュにはわからない。あの日から壊れてしまった心では、受け止められない。

けれど、それは決して不快なものではなく、ルルージュはただ戸惑いと、不可解な感覚を抱えていた。以前の彼女なら、それが「ぬくもり」だと、知っていたはずだったのだが。

デ・ロル・レのことは、正直、どうでもよかった。敵として立ちふさがるものは、すべて斬り伏せる。それが何者であれ、変わらない。

そう、そして。

「……」
ルルージュはソウルイーターをゆっくり持ち上げた。

冷たい刃に頬を寄せ、愛おしむように呟く。

「もう少しですわ……あなた……」

仇敵を為す術もなく見逃したのは、確かに悔しい。

しかし、向こうから意図を持って接近してきたのだ。必ず、もう一度自分の前に現れる。

その意図がなんなのか、そんなことはどうでもよかった。意味のない殺戮の日々が、ようやく終わる。終わらせてみせる……。

再び大きな息を吐き、ルルージュは壁にソウルイーターを立てかけた。

頭に手をやり、髪を結んでいたリボンをはどく。緋色の鮮やかな髪の毛が、肩先に流れた。

「そうやって、髪を下ろしたところも素敵だね」

誰もいないはずの部屋に響く、おっとりした声。

しかし、ルルージュは驚きもせず、振り返りもしないで、ため息をついた。

「ノックもしないで入るのはおやめなさい、と、何度云えばわかるんですの」

「あはは、ごめん。北都ちゃんの部屋から、直行しちゃったから」

「……北都さんの？」

眉をひそめて、ルルージュが振り返る。その視線の先では、千鳥がいつも通りニコニコと笑っていた。

そう、いつも通り。ルルージュでなければ、そう信じただろう、笑顔で。

「……何か？」

「うん、疲れてたみたいだね。転移するなり、気絶しちゃったから、部屋まで送ったの」

「……」

「北都ちゃん、びっくりしてたよ。ルルージュに優しくしてもらって」

「……くだらないことを」

つい、とルルージュは眉間にしわを寄せて目をそらす。

自分でも、わからない。なぜ、あんなことをしたのか。気づいたら、手が動いて、思いがけないことを口走っていた。

「私にも、昔、同じようにしてくれたことがあったよね」

「……」

「そのおかげで……私……生きてこられたよ……」

「……千鳥……？」

視線を戻すと、やはり千鳥は微笑んでいた。

その様子は、悲しげではない。慈しみと、感謝と、そして……。

「ごめんね、疲れてるとこにおじゃまして。帰るね」

千鳥が踵を返した。今度はちゃんとドアから出ていこうとする姿に、ルルージュは呼びかけた。

「千鳥」

「……なに？」

「あなたは少し、頭の悪いところがありますわ」

「……も、なにそれ？」

苦笑しつつ、千鳥は振り返った。しかし、ルルージュの真剣な睨むようすでさえある眼差しを受け、面を引き締めた。

ルルージュは淡々と、言葉を続けた。

「あなたはもう、羅生の身内ではありませんわ。その簡単な事実を、忘れないようになさい」

「……ルルージュ……」

「おやすみなさい」

云い捨てると、ルルージュは顔をそらし、ベッドに腰を下ろした。もう千鳥の方を見ようともしない。

千鳥はわずかな時間、そんなルルージュを見つめていたが、やがて満面の笑顔を浮かべて、ルルージュに手を振った。

「うん、おやすみ、ルルージュ」

「……」

ドアを開けて、千鳥が出ていく。静寂が戻った部屋で、ルルージュは組み合わせた両手を額に当て、目を閉じた。

その姿は、祈りを捧げている聖女のようにさえ見えた。

*

自室に入るなり、千鳥もルルージュ同様、大きなため息をついた。

乱暴なぐらい勢いよく、白いドレスを脱ぎ捨てる。そして、クローゼットを開いて、以前の青い衣装を取り出した。

そして、着替え終わると、ゆっくり両手を顔の前に掲げた。目を閉じて、少しばかり念を込める。

千鳥の髪を淡い光が覆った瞬間、染料がはじけ飛んで、髪の色が元の青に戻った。

最後に帽子をかぶり、千鳥は鏡の前に立つ。新しいドレスを試すかのような仕草で、色々なポーズで自分の姿を確認

する。

「うん、ふっかっつ」

二ツと鏡の自分に微笑みかける。が、すぐにいちばん肝心なものを忘れていたことに気づいて、慌ててベッドの下を探った。

そこには一つのケースがあった。鍵を外して、千鳥はゆっくりとその蓋を開けた。

入っていたのは、一振りの刀刃だった。

数多の血をすすり、恐怖と憎悪と侮蔑を込めて呼ばれた、暗殺者のスライサー。

千鳥はそれを取り上げて、もう一度、微笑んで見せた。

「完全復活、だね」

その笑みは、やはりルルージュの部屋で見せたのと同様、悲しげではない。

自分の側にいてくれたひと達への慈しみと感謝と、そして、強い決意を映していた。

ルルージュの言葉が甦る。

(その簡単な事実を、忘れないようになさい)

千鳥は笑顔で、頷いた。

「うん、忘れない……。ルルージュと、北都ちゃんと、一緒にいたこと……。そして……」

スライサーを抱きしめる千鳥。微笑んだままで、涙が一粟、その頬を流れた。

「私が、『青の戦慄』だってことを」

end

PDF版あとがき

風雲急を告げる展開……になつていると、嬉しいのですが。またまた久しぶりのシリーズ更新です。

今回のひとまとめは、結構時間がかかりました。まあ、間に「紅と黒の獣」とか「A Day」とか単発ものも書いています。すが。やはり悲しいお話はテンション保つのが難しいのです。

……これから、もっとへヴィになっていく予定ですけど(汗)。

次でようやくキャラが出そろうので、頑張りたいです。

……と云った反面、ちょっと一休みしてジョルジュ編始めた方がいいのかなあと思ったり。話のバランスが悪いんですよね、このままだと。

どうなるかは、読者様の応援次第でこと(笑)。

しかし、もたもたしている間に、PSOはエピソード3が出てしまいますね。マリア・ツヴァイの出番は本当にあるのか(笑)。

それにしても、どうしてエピソード3はカードゲームなんですかねえ……。

せめて年内には次の動きを出したいと思っております。気長におつきあいいただければ嬉しく思います。

ご感想などいただければ、幸いです。

二〇〇三年七月十六日

八神大輔

初出

それは、失われた詩

二〇〇三年一月八日

黒衣の狙撃手

前編

二〇〇三年二月十八日

後編

二〇〇三年四月二十一日

intermission -

二〇〇三年七月十一日